

## 『板倉鼎・須美子』展関連ボランティア企画



### 二人の軌跡をたどろう



[ 1 生い立ちから出会いまで 8階 ]

#### No.1 - 4 千葉町 板倉鼎

##### 一画家志望

医業を継がせようとする父の希望に沿い入学した旧制千葉中学。そこで鼎は工部美術学校で洋画を学んだ美術教師堀江正章と出会います。堀江の教え子には後に東京美術学校で鼎の師となる岡田三郎助などがいました。小学校時代から絵を描くことを好んだ鼎は堀江の指導の下、本格的に油彩画も描くようになり、画家を志すようになります。

明治44年(1911年)5月に落成された旧千葉県庁舎はドーム型の屋根を持つルネサンス様式で柱とアーチに大理石を用いた鉄骨煉瓦作りの建物でした。

描かれた県庁舎は前景部分がキャンバスに鉛筆描きのまま。あえてそうしたのか?パリに留学してからも常に様々な画法を研究した鼎の姿を髣髴とさせます。

薄紫を帯びた空のもとに広がる千葉の町は、十代の鼎にとってどのような場所だったのでしょうか?(S.N)

#### No.1 - 25 木影 板倉鼎

##### 一家族の明るい思い出

第4回帝展に入選したこの作品、板倉家の広い敷地の中での幸せな家族の団欒を描いたものと思われる。真ん中奥で懸命にマンドリンを弾いているのが鼎の妹の弘子。鼎の死後111才で亡くなるまで作品を保管し続けた。

この絵には登場しないがパリ留学で鼎・須美子夫婦を支えたのは洋画家の岡鹿之助。鼎が生きていれば夫となったかもしれないと弘子は語っている。鹿之助は鼎との友情から残された須美子たちをパリから励まし続けた。しかしそれも須美子の死でぷつぷつと途絶えてしまう。親しい人たちを失っていく弘子。この明るい絵からは想像もつかない未来となった。(S.A)

## No. 1 - 3 9 少女と子猫 板倉鼎

母が丹精こめて管理していた庭に日傘をさして子猫をだく妹。板倉鼎青年が描く妹弘子さんの肖像画は全て兄妹愛に溢れている。

白いパラソルと同じく白い洋服がさわやかで清楚な印象。

ふと、フランス人印象派画家クロード・モネの「日傘をさす女」を思い出した。東京美術学校入学早々、アテネフランセ夜間でフランス語を学んだ鼎青年。早い時点でフランス留学を心の中で決めていたのだろう。(Ma.S)

### [ II 出会い、結婚 8階 ]

## No. 2 - 1 須美子 板倉鼎

一惹かれあうもの

17歳～18歳頃の須美子。内気ながらも思慮深く大きな瞳がどこか遠くを見つめるような表情が印象的です。

鼎の画家としての目は須美子の豊かな内面性を的確にとらえています。

親戚の紹介で出会った二人。最初、鼎は大きな瞳の須美子に派手な印象を持ったようです。しかし、美術と文学に強い関心を持った二人が意気投合するのは間もなくでした。

出会って約半年、鼎 24歳、須美子 17歳の若々しいカップルが誕生。二人の未来を築くためパリへと旅立ちます。(S.N)

### [ III 出発—ハワイへ、そしてパリへ 8階 ]

## No. 3 - 8 土に育つ 板倉鼎

一赤い土

パリに向けて横浜港を出発した二人は、途中のハワイで約4か月を過ごします。

米国の移民法改正により日本からの労働移民が禁止されたため、二人は移民の嫌疑をかけられ入国早々収監されたり、用意されているはずの住まいがなかったり、急な個展の開催とその準備など。南国のハワイでの生活は二人にとって慌ただしい日々でした。

そのような日々でも画家としての鼎は、ホノルルの美しい自然や様々な光景を描きます。

ホノルルの赤い大地の上に裸足で立つ先住民の女性。赤く焼けた肌と黒い瞳が白いワンピースに映えてとても印象的です。松戸の実家の庭とは違う力強く生える南国の植物を鼎はしっかりと描きます。ハワイの大地と空気。そして人々。また一つ鼎の作品の色遣いに深みが増します。(S.N)

## [ IV パリ留学 8階・7階 ]

### No.4 - 1 - 2 人物（緑のショール）板倉鼎

アルルの思い出

パリでの鼎の勉強の成果を感じる作品です。以前の人物画と比べて骨格の比率や顔の表情などに、より自然さを感じます。

以前、フランスに滞在した時ローマ遺跡が見たくて、南フランスへのツアーに参加。アルルの町に入った時、「ここはフランス？」とショックを受けた日の思い出がこの肖像画に向き合っていてよみがえってきました。

真っ黒な民族衣装の女性が古道をそこかしこに歩いていました。

黒髪と黒い瞳。意思の強そうな唇。浅黒い肌。アルルで見かけた女性たちの姿と南仏での日々をこの作品は思い出させてくれます。(Ma.S)

### No.4 - 2 - 1 2 剣のある静物 板倉鼎

—「静物」絵画に、なぜ「剣」が？

陸軍病院の傷病軍人を癒す為、絵画寄贈を昭和16年3月16日、軍が著名な画家達に働きかけた。その時、板倉鼎の父が、パリで28歳の若さで亡くなった息子の大作遺品「剣のある静物」と「卓上果実」の2点を寄贈。

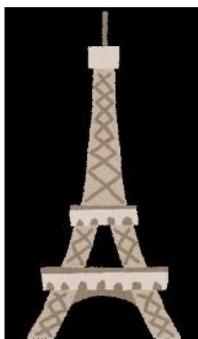
剣や、赤いクロスと赤いバラ、白い手袋や白いバラがフランスの文豪、スタンダールの「赤と黒 Le Rouge et Le Noir」を連想しました。

最初、画面中央に剣がある絵を好きになれなかったのが、「赤と黒」を連想してからはフランス文学を楽しめる絵と感じ、大好きな絵の一つになりました。(Ma.S)

### No.4 - 2 - 5 4 午後 ベル・ホノルル12 板倉須美子

絵を描き始めた頃の須美子の作品。今企画展を順路どおり鑑賞していたところに、鼎とは全く画風の異なるこの作品が目飛び込んで来ました。そして、ふと日曜画家と揶揄されたルソーが頭に浮かびました。「子供の絵みたいだ」と批判される一方で、ピカソなど著名な芸術家たちは自由で、独創性に富んだ彼の作品を絶賛したといわれます。

正式な美術教育を受けていない須美子の絵も、とてものびのびしていて、不思議な遠近感で、空想の世界を見ているようで楽しい気分になりました。描かれている木(?)が大根に見えて仕方ないです。笑 (A.H)



## No.4 - 3 - 16・17 金魚 板倉鼎

### 一額縁の中の金魚

ガラスの水槽を泳いでいるはずの金魚ですが、なぜか額縁の中に入っているように見えます。これはテーブルと水槽を見る視点が違っているからです。ピカソやブラックが提唱したキュビズムの影響でしょうか。

鼎はこの金魚をセーヌ川ほとりで買いました。よほど気に入ったのか何枚か絵の題材に使っています。静物画のように見えますが遠景に風景があると鼎自身は主張します。少し前に訪れたイタリアで見た初期ルネッサンスに触発されたとも書き残しています。ようやく自分のスタイルに自信を持てた頃の作品でした。(S.A)

## [ V 夭折 7階 ]

## No.5 - 5 松の屋敷 板倉/昇須美子

### 一最晩年の悲しみ

夫と娘たちを失ってからの須美子は、鼎の心の遺産ともいえる画業に専念することで悲しみを癒そうとしたのだろうか。

帰国後に師事した有島生馬の屋敷を描いたこの絵のあと須美子は病床に臥してしまう。「ベル・ホノルル」を描いたころの明るさや希望はこの絵のどこを探しても見当たらない。暗い色調の中に自身の悲しみを封じ込めようとでもしたのか。しかしこの絵は須美子の新たな出発点とならず、あのハワイの天真爛漫な風景は過去に置き去りにされたままである。(S.A)

## ボランティアお薦めの須美子像

## No.2 - 1 須美子 板倉鼎

赤い服の須美子を描いた連作が高く評価されましたが、私は結婚して間もない頃の作品が好きです。須美子のあどけなさ、当時の女性に珍しいモダンさ、そんな妻を愛おしく想う鼎の心情をこの絵に感じました。(A.H)

## No.2 - 5 編み物をする須美子 板倉鼎

手仕事が好きで内気だった須美子。新婚間もない妻の姿。パリに渡って母となり画家となった須美子の、前をしっかりと向いた表情と大きく異なります。二人が長生し若い頃のこの画を見たらどのように語り合ったのでしょうか。悲しいことにその時は永遠に訪れませんでした。(S.N)

## No.4 - 3 - 4 1 画家の像 板倉鼎

- ♡ 須美子は、パリで初めて油絵を描き、独特な画風で思い出を表現します。鼎も画家としての須美子を認めていたのでしょうか。絵筆とパレットを持つ須美子は、内に強い意思を秘めて、まっすぐ前を向いています。自立した女性を感じることができます。(Sh.K)
- ♡ 何か言いたげな、困ったような表情にも見える。そう思って視線を落とすと、パレットを無理やり長方形に見せるような不自然な位置の左手。  
どこかちぐはぐで、妙に気になる須美子像です。(S.H)